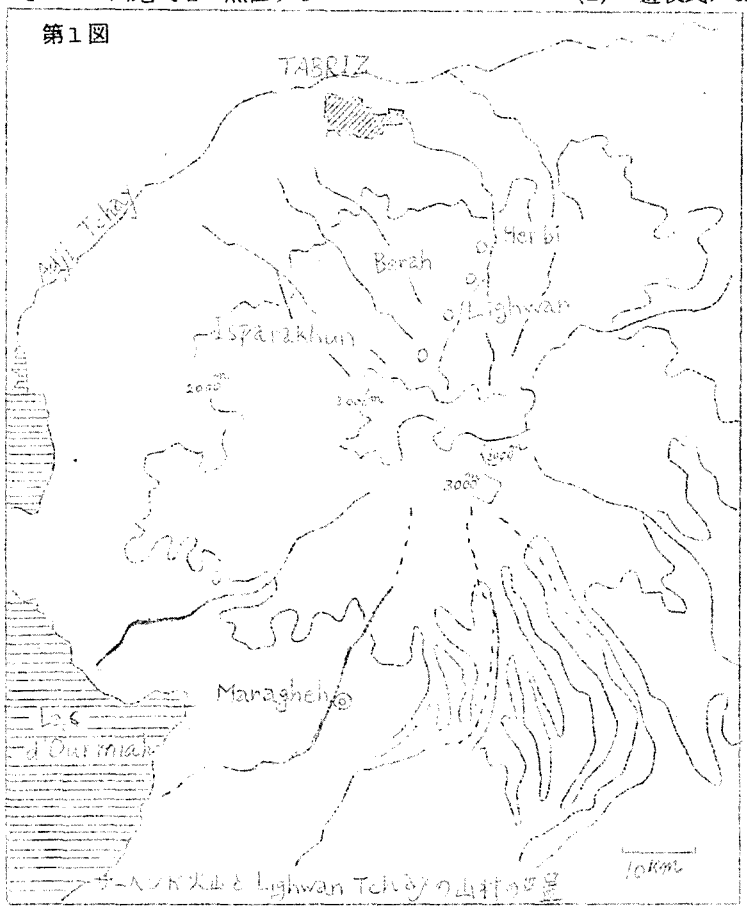
イラン東北山地民の生活様式

末尾至行

イラン東北のアゼルバイジャン地方の主邑、タブリーズ市の南に、円錐状のサーヘンドSahend火山がそびえる。海抜高度3，690m。植物帯は山裾のステップ帯から頂上の高山帯へと遷移し、かつて高度2～3，000mの間は、樫・ねず森林帯によって占められていたと想像される。火口丘の周辺から下方へかけて発達する放射状の河谷は、山頂へと至る道筋をつくり上げ、それらの谷ぞいには山地集落が点在する。



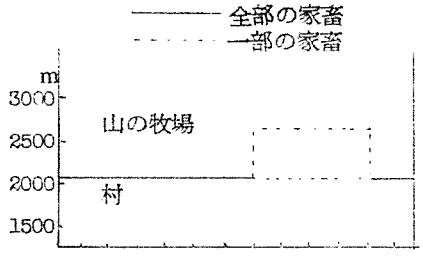
第1図
サーヘンド火山とLighwan Tchayの山村の位置

フランス、ソルボンヌ大学地理学助手ドゥ・プラノールXavier de Planhol氏は、それらの谷のうちの1つ、北斜面のLighwan tchayを踏査し、その結果を*La vie de montagne dans le Sahend*（Azerbaidjan iranien）という題名で『フランス地理学協会々報』271・272号(1958)によせている。以下はその要訳である。

(1) 遊牧民による移動牧畜　北部イランでは一般に、山腹の山地農民の民住空間より上方は、遊牧民の活動舞台となっている。サーヘンド山地の場合もその例にもれない。王領地Khalisehであるこの山頂に近い部分には、トルコ系の遊牧民Haci Alilu, Balikhanlu, Mahmudiが、用益料を支払って夏季（5月20日～9月20日）をすごす。経営地は、サーヘンドの南方、マラゲMarageh地方に求められているから、遊牧民の移動は、サーヘンド火山の南斜面に限られているわけである。北斜面には遊牧民はみとめられない。

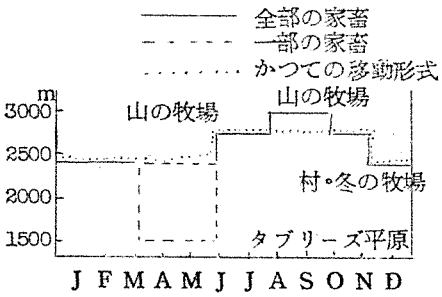
(2) 下部Lighwan tchay山村民の移動牧畜　Herbi, Berah 2村はこの谷の下方に位置するた

め、谷が広く、牧草・乾草が村落周辺で豊富にえられるため、長距離の家畜移動をほとんど必要としない。たとえばBerahにおいては、大型家畜は年中村にとめおかれ、小型家畜の半数のみが、7月中旬から11月中旬にかけて4カ月間、村から6～8km上方へ距った「山の牧草地」yaylaksへ追上げられる。移動家畜は雇った牧夫にまかされ、家畜の持主は毎日yaylaksへ搾乳に出かける。小型家畜の残り半数は村付近の牧草で養われる。



Berahの家畜移動

(3) 上部Lighwan tchay 山村民の移動牧畜　Isparakhum(2,400m), Lighwan(2,200m)の2村では、谷はせまく家畜飼料にめぐまれず、遠方に牧草を求めなければならない。そのために家畜移動は大規模にみられる。たとえばIsparakhumでの小型家畜の移動は3シーズンに分かれる。まず冬季（11月20日～4月1日）は村の家畜小舎ないしは村付近の「冬の牧草地」kishlaksに、分けてとめおかれる。kishlaksは村から1～2kmの近距離にあり、家畜が6カ所のいずれに属するかは、抽選によって定められる。分娩が3月はじめに終り、幼畜の旅立が可能となる3月終り頃から、ほぼすべての家畜は、雇入れられた牧夫に導かれ、タブリーズ平原の牧草地（国有地）へ送られる。



Isparakhumの家畜移動

この際、家畜は雇入牧夫にまかされている故、この家畜移動は純粋に移牧Transhumance 形式である。しかし、牧夫以外に、家畜所有農家から未婚男子がこの家畜群と行を共にしている。その数はIsparakhum（戸数240戸）から50人、Lighwan（戸数380戸）から100人。彼等は毎日搾乳して乳をタブリーズへ売り歩く。また交代で牧夫を手伝い家畜の監視をする。それ故に、この移動は半遊牧的な面もそなえている。

家畜はタブリーズ平原から6月中旬に村へ戻り村よりやゝ高所の「山の牧草地」yaylaksに夏のはじめまでを過し、改めてより高所のyaylaksへ移る。この上位のyaylaksは、先述の遊牧民が更により高地の夏営地へ移り去った後にあたり、農民は遊牧民に若干の使用料を支払わねばならない。上位のyaylaksに10月終りまで、下位のyaylaksに11月終りまで滞在しつゝ、家畜は秋に山を下る。

このような家畜移動の形式は、生れてから20年前後にしかならぬ。それまでは下方のBerah, Herbi村と同様な、簡単な形式の家畜移動を行っていた。ところが25年来、人口が増加傾向に入った。谷がせまくて耕地拡張ははばまれ、乾燥気候に災いされて収穫率も低い上方の村にとっては畜産品の販売が人口増加に対応する唯一の方法であった。そのために家畜をふやすには、村付近の牧草のみでは不充分であり、タブリーズ平原・高地牧草地への長途の家畜移動がはじめられたのである。

(4) 労働移動　サーヘンド山村からの出稼は、春先、食糧貯蔵の涸渇とともにはじまる。1つは

遠距離移動で、タブリーズ、テヘラン等、都市への出稼、及びカスピ海沿岸の米作地帯への出稼である。この出稼は4月中旬より7月下旬にわたる。7月末には刈入れ仕事のために帰郷する。しかし出稼者数は、ごく僅かにすぎずたとえばLighwan では、3〜40人で、村人口の1%である。第2には近距離移動で、マラゲ地方などの、春の乳期に遊牧民より羊乳を買いしめた商人のもとへ、チーズ製造人として出稼ぐ。出稼期間は4月はじめから7月末までの4カ月間、特殊技能を生かした出稼のため、収入はこの4カ月間に4〜5万フランとなり、イランでは高収入の部に属する。たゞLighwan tchay でその数は数十人にすぎない。

一般に山村の出稼は冬の農閑期に行われるものであるが、サーヘンドでは春先である点特殊である。冬季は農民は副業にめぐまれず、なかば穴倉のような家屋の中で閑居する。出稼はその規模から見て人口圧を軽減させる役割をまだあまり果していない。

(5) 結論　結論としてプラノール氏は、次の3点を省察する。

(a) 家畜移動・労働移動をうながしたのは人口圧である。人口増加を契機として、それまでの封鎖的な山村は、他地域と接触する山村へと変じた。高度に応じて気候にずれのあることを認識し高所・山麓の牧草地の利用や労働の商品化を知ったわけである。食糧の不足や家畜飼料の不足は、いずれも前年の収穫の貯えを食いつくした春先におこってくる。低地方への村民・家畜の移動は、それ故に春先に行われるのである。こうみると一般に山村の出稼は、冬の最中の出稼よりも、この春先の出稼の方が原初型ではなかろうか。

(b) サーヘンドに限らず、イラン全域あるいはヒマラヤ全域においても、農民による山地の占居が、遊牧民をますます山頂の方へ追い上げつゝ進行している。これはフランスアルプスや中部ヨーロッパの山地生活が、すでに後退しつゝあるのと対称的である。アルプス・ヒマラヤ造山帯における山地生活を一連のものとしてみた場合、ヨーロッパ側ではそれは後退し、アジア側では現に組織づけられつゝある。サーヘンドの山地生活がアジア的なものである確証によって、他の資料からも、この両者の境界はアナトリア高原東部に求められそうである。

(c) アルプス的山地牧畜形式の起原に2通りの筋道が考えられる。1つは夏・冬の牧草地間を移動していた遊牧民が、冬営地に定着した後も、移動性を残したとみる考え方。他の1つは人口増加につれて集団内の生活資料が欠乏し、定着農民がやむなく移動牧畜をはじめたとする考え方である。サーヘンドの場合は後例の典型とみとめられる。少くともアルプスの一部にも、山地の牧草地の利用が、中世後期の村の人口増加にもとづいたと想像される例が知られている。この方が一般的な筋道ではなかろうか。